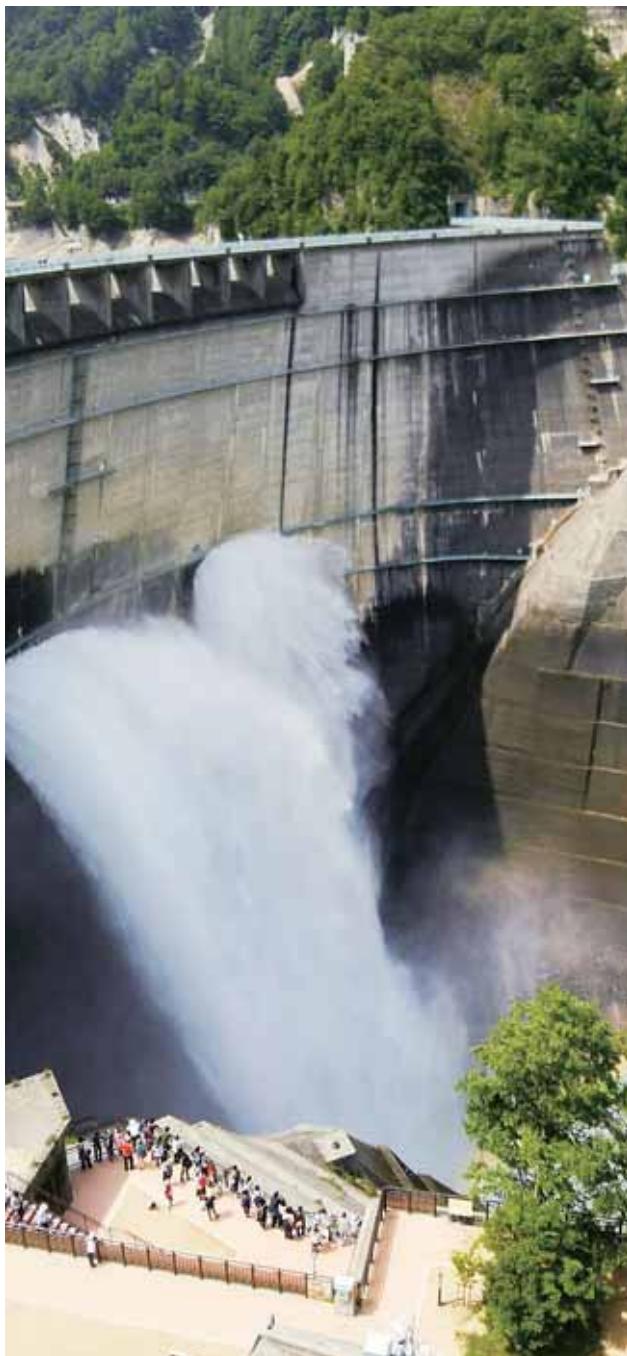


# 富山如大地

— 第143号 —

発行人 幽渓 浩 発行所 富山市総曲輪2丁目8-29 電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799  
真宗大谷派富山教務所 教区・別院ホームページ <http://toyamabetsuin.jp/>  
編集 富山教区如大地編集委員会 教務所アドレス [toyama@higashihonganji.or.jp](mailto:toyama@higashihonganji.or.jp)



展望台から見る黒部ダムの観光放水

撮影者：砂谷知昭氏

本年一月より五ヶ月間、全五回の前期教習が終了いたしました。講師には石川県かほく市より平野喜之先生（金沢教区淨專寺住職）に来ていただき、テキスト『宗祖親鸞聖人』を基に「親鸞聖人の生き方から学ぶ『真宗門徒』の生活』をテーマにお話を聞いていただきました。受講者は十一名でした。

当講座では、できる限り仏教用語を使わずに聞き取り易いお話を、というのが第一前提でした。先生は生活の中での実体験を基にしたお話を織り交ぜたり、資料として詩を用いたりして、皆さんが身に感じ取れるような内容であつたと 思います。おかげさまで座談会では、それぞれ何より生活に密着した生の意見が多く聞かれ

たように思われます。  
私たち僧侶はお話をする中でついつい言葉を難しくしてしまう嫌いがあります。単に学びが足らず、知ったかぶりでお話をしているとも言えるでしょう。

私自身、真宗門徒の一人として学び、生活している存在であるということを忘れがちだったと反省させられました。

受講の方から、今まで生きてきたことの内容を再点検（反省）でき、一人一人が今ここに在ることを確認し、今後どう在るべきかを考えさせられたとのお言葉をいただきました。

今一度、親鸞聖人の生き方から学ぶことによつて、自分自身や現代社会の問題に照らし合わせながら、と共に生き合える世界を目指したいと願う朋の輪が一人でも多く広がることを念じます。

第九組 慶正寺 渡邊静史

## もくじ

- ・法話研修会I 2~14 石川正穂氏 瓜生 崇氏
- ・研修会報告 15~17
- ・教区だより 18~20

【富山教区教化テーマ】

「なむあみだぶつ」を訪ねませんか？

# 法話研修会Ⅰ

期日 二〇一八年四月十三日  
会場 富山東別院会館

わった後、当時の駐在教導がこの事業を記録する動画を作られました。その中に「汗をかき、恥をかくことしか始まらない歩みがある」という言葉が記されています。本当にその通りになりました。汗をかいて、恥をかいて、今に至っています。

四月十三日に富山東別院会館・研修ホールにおいて、寺族研修小委員会主催による「法話研修会Ⅰ」が開催されました。『如大地』第一四三号では、本研修会の問題提起と講義録を掲載します。

## 問題提起

第十一組 玉永寺

石川正穂氏

(寺族研修小委員会幹事)



寺族研修小委員会の幹事、石川です。

「大谷派における法話の現状」  
一寺院の住職の視点から」という  
テーマで問題提起します。

富山教区で法話を念頭に置いた研修が本格的に始まったのは、百人百話が実施されてからだと思います。  
二〇一四年三月三日から五月十一日まで八十六人の富山教区の住職・寺

一百人百話が明らかにしたこと

寺族研修小委員会の幹事、石川です。「大谷派における法話の現状」という  
一寺院の住職の視点から」という  
テーマで問題提起します。

富山教区で法話を念頭に置いた研修が本格的に始まったのは、百人百話が実施されてからだと思います。  
二〇一四年三月三日から五月十一日まで八十六人の富山教区の住職・寺

を指摘されています。百人百話が終了を記録する動画を作られました。その中に「汗をかき、恥をかくことしか始まらない歩みがある」という言葉が記されています。本当にその通りになりました。汗をかいて、恥をかいて、今に至っています。

族・坊守が連続して法話するという企画的な企画でした。その準備に向けて色々な研修会も実施しました。非常に盛り上がってたくさん参詣者も来てくださいました。その都度、聴衆に感想文を書いてもらい、それを話者のところへ郵送するということもされました。誉めていただくといふこともあります。誉めていただくといふこともあります。残念ながら厳しい評価もありました。「勉強不足である」「法話という内容ではなかった」「声が小さかった」「世間話で仏教の話ではなかった」「難しく理解できない」など、シビアな感想が書いてありました。それを読んで法話がトラウマになった人もいると聞いたことがあります。その後

## 二 同朋会運動と「法話」

私は最近、本願寺派の法話を志す

て、そのことについてお話しします。お西にはしっかりとした布教団があります。伝道院という養成機関が確立しております。ところが私達大谷派には、それに当る組織、機関がないのです。なぜこのようなことになつているのかについて改めて考えてみます。

現在の大谷派教団の基幹である同朋会運動の源流は、清澤満之から始まる曾我量深、金子大榮といった方々による近代化の運動からはじまります。彼らの近代教学は、江戸宗学、高倉学寮の教學と対立しました。江戸宗学は当時の布教活動と一体でしたから、同朋会運動は同時代の布教活動に対して批判的であったと思ひます。そうした対立を背景として布教団は徐々に消滅していったのだと推測します。それに対して本願寺派にはこうした対立がなかったので、しっかりととした布教団が存在するのでしょうか。

それでは同朋会運動において法話はどうなったかと

いうことです。が、講演調のものが多かったのです。門徒さんにも真宗聖典を持たせて、様々な文献を参照しながら講義をするというスタイルが多かったのではないか。最近は変わつてきているかもしませんが、いわゆるお寺の説教という感じではないのです。

なぜ布教団や伝道院のような布教者養成機関がなくなつていったのかについて、近代教学の成立が関係しているというのは私の推測です。そして、なくなつたことが良いのか悪いのか、評価は難しいと思います。

### 三 本願寺派と大谷派の違い

先日、滋賀県で大谷派の南学会と

いう有志の集まりが一泊二日の法話研鑽合宿を催し、私は初めてそこに参加してきました。伝道院の元講師から、本願寺派の布教使養成のカリキュラムについて拝聴しました。法話実習もあり、私も実演して点検をして頂きました。その時、失礼な表

内容は宗祖の言葉以外の『歎異抄』『御文』等を使用してもよいそうです。また本願寺派には『三業惑乱』という事件がありましたから、いわゆる異安心に近いような内容は、絶対に避けることがあります。そうした意味で、いろいろな決まり事があると感じました。大谷派には法話について決まり事は何も無いでしょう。どのよう法話がダメというのには何かありますか。

現在、私は六月三十日に富山東別院で開催する「第十回若手有志による合同布教大会」の事務局をしていました。その協力を要請したある本願寺派の方から、布教使には教義をコントロールする役割があるという見解をお聞きしました。本山が示す正

ごとが多いなという印象を持ちました。例えば布教の「ご讃題」(本派では初めに聖典の中の言葉を称えて、その言葉に即した布教することを基本としている)は、宗祖の言葉を引用するようにと指導があります。内容は宗祖の言葉以外の『歎異抄』等を使用してもよいそうです。また本願寺派には『三業惑乱』という事件がありましたから、いわゆる異安心に近いような内容は、絶対に避けることがあります。そうした意味で、いろいろな決まり事があると感じました。大谷派にはり似たような法話はありません。その意味では布教団や伝道院というしっかりとした組織が私たちにも必要かというと、必ずしもそうではないと私は思います。無いことで私たちは自由なのです。

滋賀での法話研鑽合宿の際に、ある大谷派の方が法話実演をされました。それは感話的な内容でした。「私はこのように教えを受け取つている。しかし間違っているかもしれません」と感じている」という口調でした。大谷派にはそういう感話的な法話があります。「私はお念佛が大事だと思うのですが、なかなかいただけません。どうして南無阿弥陀仏が御本尊なのか分かりません。迷うば

れに基づいて異安心、異議を教戒している、として協力を断られました。本願寺派には同じような法話が多いという見方がありますが、それにはこうした面があるからかもしれません。

かりです」という話が法話になるのです。本願寺派ではこれはダメだとされます。はっきりと「こうなです」と言い切らないと聴衆<sup>ちようしゅう</sup>が不安になると注意されていました。これも違うところだと思います。

#### 四 機の深信

大谷派の法話の傾向として、「機の深信」をよく取り上げるということがあります。昔のお寺の説教も機の深信を取り上げたものが多かったです。「あるところのお婆ちゃん<sup>うばちゃん</sup>がすごく欲が深くて、人を羨んだり<sup>うらやま</sup>羨んだりして、皆さんもそうじやありませんか」というようなお説教です。そして、ずっと罪惡<sup>ざいあく</sup>深重の我が身をえぐっていく法話がよくありました。今の若い人でもそういう法話をされる人がいます。同朋会館でも「機責め」があつたといふ事は御存じでしょう。同朋会館や修練<sup>じゅりん</sup>の場におきまして意見を言うと「お前はそういう事が言えるような正しい者だけ自身を思っているのか」と、

なかなか厳しい機責めがありました。

今それは徐々に減っていると感じます。あまりに自虐的<sup>じい</sup>で卑下慢<sup>ひげまん</sup>を押し付けているのではないかと私も思います。

ます。しかし、大谷派の精神的な根っこに残っています。何かを表現し伝えようとする意欲を押さえこんで「じゃあお前はどうなの?」と、必ず自己<sup>じこ</sup>を問わせる傾向があります。

それは一面、社会に対して内向的に籠る傾向です。

先日、同朋会館で教導と補導を対象とした研修会に出席しました。自信教人信<sup>じんきょうにんしん</sup>という法語について「あなたが信じるならば人に教えてもいい。自分が信じていないものは人には教えではない」という講義がありました。言葉の意味としてはそうでしょうが、抑え込む傾向を強く感じました。喜びをもつていただいた感動は、そのまま他の人にも伝えたいという情熱になります。それが独りよがりとか勘違いであつてもです。

「教化者意識」という問題もよく取り上げられます。真宗門徒は聞法者があって、だれかを教えてやろうと驕<sup>おご</sup>って考えることはもつてのほかだと。人の上に立つて何か教えようという意識を持つてはいけないという事を強調します。「御同朋御同行<sup>おんどうぼうおんどうぎょう</sup>」の精神に基づく大切な指摘ですが、どうも萎縮<sup>いしづく</sup>していくとか、大事な教えを聞いて私も教えを伝えたいという思いがあつても、出発する前からブレー<sup>キ</sup>をかけられているようです。それこそ救いが一人の中で完結してしまうならば、自分さえ助かれればよいという、声聞縁覚<sup>しゆうもんえんがく</sup>になってしまうのではないでしようか。

これに対して本願寺派は機ではなくて「法の深信」を強調する傾向があります。阿弥陀様にお助けいただきお慈悲<sup>じみ</sup>がありがたいという法話が確かに多いです。そして外に対してもどんどん積極的に出て行きます。一般向けの分かり易い解説の付いた聖典を作ったり、多彩なイベントをプロデュースして、世間にアピールするものが上手です。本願寺派は教団を者であつて、だれかを教えてやろうと驕って考えることはもつてのほかだと。人の上に立つて何か教えようという意識を持つてはいけないという事を強調します。「御同朋御同行<sup>おんどうぼうおんどうぎょう</sup>」の精神に基づく大切な指摘ですが、どうも萎縮<sup>いしづく</sup>していくとか、大事な教えを聞いて私も教えを伝えたいという思いがあつても、出発する前からブレー<sup>キ</sup>をかけられているようです。それこそ救いが一人の中で完結してしまうならば、自分さえ助かれればよいという、声聞縁覚<sup>しゆうもんえんがく</sup>になってしまうのではないでしようか。

そして今、私は親鸞会<sup>しんらんかい</sup>という教団に直面しています。「本願寺は正しい教えを説いていない」と私たちを批判する教団です。「本願寺の坊主にはお念佛を説明する力がない。千畳敷きの親鸞会館へ行けば、本当の信心を教えてもらえる。本当の教えが聞ける」として大きくなっています。研修会でこの事を話すた教団です。研修会でこの事を話すと「その通りですね」と言う人がたまにいるのです。「私は確かにそんなちゃんとした信心を受けておりません。ちゃんとしたお話を出来ません。寺に生まれたもので親の言うとおりにしてきただけですから、自ら佛敎を求めるようと思つた方々にはかないません」と言う方がいらっしゃるのです。何とも悲しい事です。お寺を預かり、親鸞聖人の教えに触れてきた中で、いただいたもの、そし

て誰かに伝えたいものは何も無かつたのでしょうか。

今年の一月頃、「ナビゲーション・お寺が消えてゆく」困窮にあえぐ過疎地の僧侶たち」という番組がNHKで放映されました。<sup>かみいち</sup>市町の東種で、本願寺派寺院の繼承者が見つからず、廃寺に至ったのです。地域の方が「伝統のある、地域に住みのあるお寺を維持したかった」と、インタビューに答えていました。富山には同じようなケースがたくさんあるので、本願寺派はそうした寺院を合併して存続を図る試みを始めていました。ところが、この内容でした。ところがインタビューを受けた方のところへ「こちらはお寺が無くなつたと聞いております。皆さん法座を求めておられるのでしょう。公民館で親鸞会の話をさせてください」と訪ねてきた人がいたそうです。その申し出は断られたのですが、車中で映画上映ができるバスが来まして、何人の方々が利用されたのです。この事が本願寺派で問題となり、東種の公民

館で五月に布教団による布教大会が実施されることになりました。お寺が無くなつても法を求めている方がいらっしゃるのだから、改めて法座を提供していこうという動きが本願寺派で始まつたのです。

私たちは人口減、高齢化に直面しています。お講も立ち行かなくなつてきています。法座に集まる人の数は減少しています。これからの寺院の存続を思うとつらい気持ちになつていています。不安になつている人は多いと思います。しかし、そうした状況の中でも求める人がいらっしゃるのならば、法を伝える場を残し伝えていく努力をしませんか。困難ですが、どうしたらそれができるのかを共に考えることが今、大事だと思ひます。

## 六 まとめ

先日、急に門徒さんの親戚の方が訪ねて来られました。新興住宅地にお住まいの五十代の女性です。重い病気をされたことがきっかけで、亡

くなつたお母さんがお寺によくお参りしていた姿を思い出し、お寺でどういった事を聞いていたのか知りたくなつた、と言われました。このような、人生の転機にふつと仏法に触れたくなつた方に、私たちはちゃんと法座を提供できているのでしょうか。そうした方々の多くは新聞広告やチラシを見て、インターネットで検索して、親鸞会などの新宗教を訪ねて行くのです。

聞法の場を創ること、継続することはそう簡単ではありません。最初に申し上げたように何の組織も機関もない大谷派で正面から法話にて取り組むというのは、ゼロからのスタートであると言つてもよいかもしません。今回のような研修会をすればすぐにどうにかなる訳ではありません。それでも私たちの法話をする力が少しでも上がれば、求めている方に少しでも対応できるのです。

次回の法話研修会Ⅱは「話し込み法話」という法話実習を行います。これは瓜生さんが親鸞会の講師であつ



た時の経験を踏まえて編み出された、極めて実践的な法話練習法です。この研修を受けた方に話そうという意欲が湧くことを目指します。この研修を受けられた方々が、これからの大谷派、富山教区の力になっていくことを願います。

これで私の問題提起を終わらせていただきます。この後、全体の座談会で皆様の法話についての意見をお聞きして、法話研修会Ⅱを実施するための共通理解を図つていきます。ありがとうございました。

## 講義

瓜生 崇氏

京都教区玄照寺住職。青少年センタースタッフ。一九七四年生まれ、親鸞会元講師。脱会し現在に至る。大谷派有志の会で法話研修会を開催。



皆さんこんにちは、瓜生と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

私はかつて親鸞会の講師をしていました。今日午前中に少し時間があつたのですから環水公園を散歩して参りまして、その近くにサンフオルテという建物があります。「懐かしいな」と思いました。親鸞会時代に、あそこでよく私は法話会をしていたのです。四年間くらい続けていたのです。四年間くらい続けてそれなりに参詣者も増えて、その後に親鸞会をやめて脱会しました。もしもサンフォルテで親鸞会の講座がされているとしたらそれは僕のせいですから皆さんにはお詫び申し上げなければなりません。

### 親鸞会の布教使の育成方法

私は親鸞会で八年間講師をしてきました。親鸞会で八年間講師をしてその後大谷派の住職になりました。最初に法話をしたのは二十三歳の時です。もちろん親鸞会にいたときの話です。それを法話と言つて良いのか甚だ疑問ですけれども、とにかく法話らしきものをしたのはそれが最初です。それから八年間、親鸞会を辞めるまでにどの位法話したかと考えてみると、二千回位はやつてているでしょう。

その後は大谷派の住職になりまして、本願寺派で布教使の資格を取り学校に「伝道院」というのがありますから皆さんにはお詫び申し上げます。

まして、カルト問題を中心にその派外講師を五年間やっております。ですから本願寺派の僧侶養成のカリキュラムにも多少詳しい方だと思います。

まず親鸞会の布教使はどのように育成されるのかをお話します。

私の時は「随行」というのをしておりました。これは昔の大谷派もそうだったと聞きますが、つまり先輩の布教使にくつづいて行くわけです。私は親鸞会で八年間講師をしてそくつづいて行くわけです。私もむちゃくちや叱られました。一番嫌だったのが自分の話をテレに録音されて、そして帰りの車の布教使にくつづいて行くわけです。

親鸞会の場合は、組織上の上司に付きます。その後に会長である高森顕徳氏の随行をしました。

上司の話があるときは一番前でずっと聞いていて、それで聞いた話を「聴聞録」という文章に書き起こします。テープで録音するとかメモを取るのでは無く、三時間の話を記憶を辿つて書き出します。これをやりましたら話の内容が頭の中に全部入ります。その後は大谷派の住職になります。何しろ聞きながらメモを取ってはいけませんし、録音もしてはいけませんから必死に書き出せるようになつてくるようになります。何しろ聞き

### 開発法話

それが出来るようになつて、一時間三十分位の話をするようになつて

いきます。そして自分で法座の会所を立ち上げる事をします。開発法話と言つていました。私が最初に赴いたところは仙台でした。仙台は浄土真宗があまり無いのですが、そこでゼロから開拓するのです。それで近くの公民館とか市民ホールを借りに行きます。そしてその周辺でチラシを撒いて人を呼びます。当時二十代前半です。こんな若い人間が法話をするのかとびっくりされますよね。

「今日、法話される講師の先生は来られておいでですか」と参詣者の方から聞かれて、「それは私です」と言つたらその瞬間帰る方もありました。

それからチラシを撒いても一人も来ない事はよくありました。僕が話をしたところは石巻とか多賀城とか相馬・原町というところ。津波で大きな被害のあったところです。あの辺りを私はずっと廻っていました。チラシ配つたりアニメの販売をしたりですね。

いきます。そして自分で法座の会所を立ち上げる事をします。開発法話と言つていました。私が最初に赴いたところは仙台でした。仙台は浄土真宗があまり無いのですが、そこでゼロから開拓するのです。それで近くの公民館とか市民ホールを借りに行きます。そしてその周辺でチラシを撒いて人を呼びます。当時二十代前半です。こんな若い人間が法話をするのかとびっくりされますよね。

「今日、法話される講師の先生は来られておいでですか」と参詣者の方から聞かれて、「それは私です」と言つたらその瞬間帰る方もありました。

年やつていると継続して法話を聞くサンガが生まれてくるのですね。

今思うと皆さんにとっては大変ご迷惑なことだったと思います。富山でもそれをやつっていました。サンフオルテでやつていたのはまさにそうです。来られていたのは多分皆さん

が教化者意識って仰いましたね。教化者意識って何故生まれるかと言つたら、用意されたところに「先生、先生」と言われてポンと立つて話をするから教化者意識が生まれるのであります。自分で聞く人がいない所からチラシを撒いて法話の会所を立ち上げたり案内を工夫したり、お話も正信偈のシリーズものにしたりとか考えるようにになります。そんなことを数年やつていると継続して法話を聞くサンガが生まれてくるのですね。

足にマメを作るほどチラシを撒いて、怪しい宗教の勧誘扱いされそして来た人もすぐに帰つていかれて、そんな中で泣く泣くやつてきた人に教化者意識なんてないのです。「何とかして聞いてくれ。何とかして伝わつてくれ」という思いしかありません。そういう意味では教化者意識が生まれるというのは、とても恵まれた環境だと言えます。親鸞会みたいに無理で強引な布教勧誘をしなくてよかつたわけです。もちろん、無理で強引な勧誘などする必要も無いし、するべきでないと想いますが。

そんなことをやつているとちらほら法話に来られるようになります。ところが一度来て帰つてしまつてもう一度と来ないのです。何で一度と来ないのだろう。どういう話をしたらしいのだろうかとチラシを工夫したり案内を工夫したり、お話も正信偈のシリーズものにしたりとか考えることをやつたら、教化者意識なんぞ生まれようがありません。

足にマメを作るほどチラシを撒いて、怪しい宗教の勧誘扱いされそして来た人もすぐに帰つていかれて、そんな中で泣く泣くやつてきた人に教化者意識なんてないのです。「何とかして聞いてくれ。何とかして伝わつてくれ」という思いしかありません。そういう意味では教化者意識が生まれるというのは、とても恵まれた環境だと言えます。親鸞会みたいに無理で強引な布教勧誘をしなくてよかつたわけです。もちろん、無理で強引な勧誘などする必要も無いし、するべきでないと想いますが。

伝教団の人は新宗教の布教が目



に障る人も多いと思いますが、彼らがあんなに一生懸命苦労して布教するというのは、予めそういう出来た場というのがないからなのです。でも私たちだって、そうやって誰もいるところからサンガを立ち上げていた先人の方の努力があることを忘れてはならないと思いますし、これからは私達もそういうことをやつて生まればならないのではないでしょうか。

## 親鸞会から、大谷派へ

私が親鸞会を出て大谷派の住職になつて、法話をもう一度することは全く思つていませんでした。当たり前ですね、親鸞会でたくさんの人を迷わせたわけですから。「お前は大谷派の住職という衣を着ているけれど、ちょっと前までは親鸞会にいて色んな人を迷わせていたのだろう、その反省は無いのか」と随分言われました。今はあまり言われなくなりましたが、内心そう思っている人は多いのではないかでしょう。

実は大谷派のお寺の住職の中で元親鸞会という人は私の他にもいらっしゃるのです。でも皆その出目を隠しています。例えば私の義理の父、つまり先代の住職も親鸞会出身の住職でした。親鸞会を追い出されて井波別院の役僧をして、そこで教師資格を取つて今の寺に入つたのです。他にも大谷派に入った元親鸞会の人はいらっしゃるのですが、み

んな私にこう言うのです「瓜生君、親鸞会出身だつていうことは絶対に言わない方が良いよ」と。「何故ですか」と言つたら差別されるからです。でももう遅かったです。私は大谷派に入る前にすでに能登教区での新宗教研修会の講師で呼ばれたことが何回かあって、みんな私のことを親鸞会だと知っていたのです。だから「今更仕方が無いから公にします」と言つたのですが「苦労するよ」と言されました。苦労したかどうかはわかりませんが、元親鸞会というレッテルは貼られました。元親鸞会としての話を求められ、求められた話をすれば更に元親鸞会というレッテルをはられるという悪循環です。

周囲からは「元親鸞会」というキヤラを売りにしているように見えたでしょう。だから自分がどこかに呼ばれて、いわゆる「普通の法話」をする事は絶対に無い、有り得ないと思つていました、自分の寺で話すこととはあつても他の寺で話すること

んな私にこう言うのです「瓜生君、親鸞会出身だつていうことは絶対に言わない方が良いよ」と。「何故ですか」と言つたら差別されるからです。でももう遅かったです。私は大谷派に入る前にすでに能登教区での新宗教研修会の講師で呼ばれたことが何回かあって、みんな私のことを親鸞会だと知っていたのです。だから「今更仕方が無いから公にします」と言つたのですが「苦労するよ」と言されました。苦労したかどうかはわかりませんが、元親鸞会というレッテルは貼られました。元親鸞会としての話を求められ、求められた話をすれば更に元親鸞会というレッテルをはられるという悪循環です。



### 話すことは聞くことである

ところが転機はひょんなところから訪れます。寺に入ったのですが収入的に家族を養っていく事が出来ました。もちろん話すことはできるのですが、残念ながら全く出来ませんでした。もちろん話すことはできるのですが、自分で伝えたいことが明確にならない。つまり親鸞会で聞いた仏教というものをいったんリセットした訳ですが、浄土真宗の救いとは一体何なのか、南無阿弥陀仏とは何なのか、親鸞会で教わったことを捨てたあの空白はそのままでした。そんな状態で法話に立つても出来はしないのです。

だから最初は散々でした。定例法話というのは住職ではなく、教区が指名した人が来るわけですから「何

だこいつは」みたいな感じです。ある住職さんは「あなたは別に法話なんでなくいいから感話から始めたらどうでしようか」と私におっしゃいました。もうプライドもズタズタです。そうしてドヨンとしたまま飛行機に乗って帰ってきました。今までずっと法話が出来ると思っていました。

たけれど俺はもう出来ないのだと思いました。それでもまた次の北海道定例の法話の日程は決まってくるわけです。伝えたいものが明確でないのに伝えたいものが話したいことだけではない。実におかしな話ですが、現場の多くの住職さんも同じ悩みを抱いているのではないでしょか。ただ、自分にとって幸せだったのは、当時の北海道の住職さんたちで、私が元親鸞会という事を知る人はほとんどいませんでした。ただ滋賀から来た若い住職に「普通の法話」を求めていたのです。これは自分にとっては涙ができるほど嬉しいことで、何とか期待に応えたいと思つたもの

だといつは」みたいな感じです。

です。

ですから、色んな人の話を聞きに行つて、真似事でもいいから始めました。初心に帰ったような気持ちで聴聞をする事になりました。多くの先生にお会いしました。そうすると、仏法を聞く事で私が一体何を伝えたのかという事が分かつて來たのです。それは言い方を変えれば、私が何を聞きたいかがハッキリしてきただということです。つまり、私が聞きたいことが話したいことだけではありません。伝えたいことが私の聞法と別にあるのではありません。私にとってナンマンダブツとは何か、親鸞会で一度捨てたはずの南無阿弥陀仏の救いとは何かを聞きたいのです。分かっているから法話をすることは、一番前に立つて話をする人間なのです。一番ろくでもない、聞き難い人間だから、法話という聞法の機会を頂いているだけなのです。

よく自分には信心も無いし、仏法理解も無いし、だから法話なんて出来ませんという人がいます。これはとんでもない自惚れだと思うのです。来ませんという人がいます。これは「俺はまだ仏法の事は分かつていな

いから。俺はまだ信心がないから、だからこんな所でお話出来ません」という人間が話さなければならぬのです。だから法話の準備や訓練は本當は要らないのかもしね。ただ聴聞する私がいるだけです。

す。それは言い方を変えれば、私が何を聞きたいかがハッキリしてきただということです。つまり、私が聞きたいことが話したいことだけではありません。伝えたいことが私の聞法と別にあるのではありません。私にとってナンマンダブツとは何か、親鸞会で一度捨てたはずの南無阿弥陀仏の救いとは何かを聞きたいのです。分かっているから法話をすることは、一番前に立つて話をする人間なのです。一番ろくでもない、聞き難い人間だから、法話という聞法の機会を頂いているだけなのです。

### 法話を大事に思つていらない

門徒さんは、お寺にお布施もして忙しい中、時間もつくつてお御堂に来て、そしてお話を聞かれる方なのです。一番前に立つて法話をする人

は、法話の依頼でもなければ仏法を聞かないのです。終わつたあとに渡される白い封筒に入つてあるものを貰えるから来る人間なのです。どう考えても一番前に立つてある奴が一番聞き難い人間なのです。それがなぜ法話をするのかといったら、そもそもしなければ聞けないからです。

人を聞法の場でみんなで育てていかなければならぬのです。ずっと下を向いてスマホを見ているなんてもつてのほかです。私が聞法するということは、私だけにとどまらない。話者を育てることになるのです。

法話される方には分かって頂けると思いますが、おばあちゃんがずっと頷いて話を聞いて反応してくれると話しやすいでしょう。私たちが誰かの話を聞く時も、そういう風に聞くべきなのです。納得いかない事があれば首を振ればいいし、そうだなと思えば頷けばいいのです。それが話者を育てます。法話者にとっては、話すことは聞くことです、聞法者がにとっては、聞くことは話すことなのです。

本当に不思議に思っているのですが、親鸞会から大谷派という教団に来て思った事は、坊さんはどうせ法話なんて大して大事に思ってないのだろうという事です。ここにいる方は、わざわざ研修会に来られるくら

いですから大事に思っておられるのかも知れませんが、ほとんどのお坊さんは大事に思っていないのではないかですか。

親鸞会時代の僕の上司ですが、この人は新潟のお寺の次男坊で親鸞会に入つて本部長をやっていました。

その人に「なんでお寺をやめて親鸞

会に入ったのですか」と聞いたら

「お寺はちゃんと仏法を伝えること

ろではない」と言つたのです。ちゃ

んと仏法を伝えようとしている人は

いないと言つたのです。「本當ですか」と言つたら「そうだよ、だって

報恩講とか永代經といつたら、法中

といつていろんなところから、大き

いお寺だつたら十人位お寺さんが來

るのです。でも内陣でお經を読んで、

読み終わつたら法話が終わる前に全

部帰るんだ、ひとりも残つてゐる人はいない」と言つたのです。つまり、

そこで仏法を大事に思つている人はいないという事。私はそれを聞いて

「よう」と言つたのです。でも上司は「君はお寺に行つた事がないから分からんかもしけんけど、今言つた事は全部本当だ」と言いました。

そして私は大谷派の僧侶になつて、寺の住職になりました。本當でした。自分の寺でも、他の寺でも、法中さんで法話に残る人なんてほとんどいない。みんな当然のように帰つたのです。七年やつてこれです。そりや忙しい時もあるでしょう。でも、毎回どんなときでも帰るのです。これはもう、身体をもつて仏法なんて聞く価値がないと言つてゐるのと一緒に坊さんが聞く価値がないと思つています。坊さんが聞く価値がないと思っている話を誰が聞きますか。法話に若い人が来ない、年寄りしか来ないと嘆いてゐる人がいますが、坊さんが忙しい中時間をかき分けて聴聞しないのに、忙しい若い人が法話に来るなんてことは絶対にありえません。当たり前でしょう。

ここに来る前、全国の坊守会連盟の研修会がありましてその時、坊守



さんから質問が出たのです。「何でオウム真理教に入つた人のような人達が私達の寺に入つて来ないんですか。何でアレフとか親鸞会に行くような真剣に生死の解決を求めている人が寺に来ないのですか」と。それに対して私は「来るはずがない」と言いました。

だつて仏法を聞くのも伝えるのも大事に思つていい訳ですから。坊さんですら大事に思つていいなお話を聞きに来る事なんて絶対にありません。話が始まるのに法中の坊さんがバラバラと帰つて、講師が出てます。坊さんが聞く価値がないと思つてゐる話を誰が聞きますか。法話に若い人が来ない、年寄りしか来ないと嘆いてゐる人がいますが、坊さんが忙しい中時間をかき分けて聴聞しないのに、忙しい若い人が法話に来るなんてことは絶対にありえません。当たり前でしょう。

来て、「今日の話は寝てもいいですよ。仏法は毛穴からでも入りますから」と言わると、寝てもいい話なら最初から話すなと言いたいのです。そういうところに命をかけて生死の解決を求めている人が来ますか。断言できます。百パーセント絶対にきません。

もちろんすべての法話が「命がけで生死の解決を求めている人だけが集う場でなければならない」とは全く思いません。そんなふうになったら、うちのご門徒さんの半分は来なくなってしまいます。でも、何故真剣に生死の解決を求めている人が来ないのかという自覚は、私は持つていても良いと思うのです。どちらが良いとかじゃないのです。法話がお寺の行事の消化試合になっているのではなかろうかという事なのです。

### 一生懸命話す

法話は、どんなに下手くそで中身

が無茶苦茶であっても、一生懸命話

したら聞かれる方はありますよ。でも今、若い方の法話を見ていても、すごく落ち着いているでしょう。上手にサラサラッと話して帰つて行くのです。それで最後、「自分が問われるのです」とか「浄土の願いに生きるのです」とか「何か分ったような分からぬようなどこかで聞いたてきた、これを言えば收まりがつくみたいな結論を持ってきてね。綺麗に終わらせる必要なんて一つもないのに。

これはお西もそうなのです。お西の法話というのは上手いですよ。きっと筋道がたててあって教えられた通りに話していきます。若い人でも本当に上手ですよ。ところが、多くの人からは一生懸命さが伝わってこない。つまり、目的は「僧侶としてしっかりと法話をすること」であって、伝えたいことがあるから法話しているんだとは感じられないのです。

結論がどっち向いているか分からぬとも、とにかくそこで熱をもって話をする人が本当に今いよいよを感じがします。一生懸命に話をする事がなんか恥ずかしいような気がしているのではないですか。落ち着いてサラッと話をする事が良い事だと勘違いしていらっしゃるのではないかと思います。

話の内容をどう組み立てるか、どういうふうに話をするのか、そんなことは本当はどうでもいいんですよ。声を枯らしてこの一座の中で何とか伝えていくのです。そういうものがあれば話は伝わっていくものだと思いまし、その伝えたいことというものは私が一番聞きたかった親鸞聖人の教えであり、それを生涯かけて聞いていくのが自らの聞法になるのです。そうなったら法話というのは別に誰に指導されなくとも、ちゃんと

沙加戸先生のレジメの最初には「法話は聴聞である」とあります。話をするという事は聞く事なのです。

思います。

### 法話で何を語るのか

それで、皆さんのお手元にレジュメがありますが、これは僕が書いたものではなく大谷大学名誉教授の沙加戸弘先生（さか戸ひろし）という方が書かれたものです。この沙加戸先生をお招きして法話合宿というものを私達はやっています。今年、沙加戸先生はご病気で出られなかつたものですから、義本弘導先生（ぎほんじゅうさん）という本願寺の布教使を呼んで指導して頂きました。いつも合宿では大谷派の沙加戸先生と本願寺派の講師の先生と両方呼んで話を聞いてもらっています。参加者も宗派を問いません。それがまたみんなの刺激になつてていると思います。私たちちはついつい、自分たちと同じ傾向の人たちだけで固まつてしまふ傾向がありますから。

沙加戸先生のレジメの最初には「法話は聴聞である」とあります。話をするという事は聞く事なのです。そして、「自分の領解を自分の言葉

で音声として聞き、一室の行者と共に有し検証して自らの領解を深める」とあります。僕には教えるものがないとか、私には話出来るものがないとか、それは法話をしない理由にはなりません。そうであればあるほど前に立って話をしたらしいのです。

そして「自分の安心の目次をたてる」「自分の領解を体系化する」「今私の導いてくださされたのはどなたであるか」「今の私にとって釈尊、七高僧、親鸞聖人、蓮如上人、清澤先生はどのような御方であるか」

この体系化ができるないと本を読み法話を聞き体験して感動に出遇つとあります。つまり「私」というものが出遇った南無阿弥陀仏を語るのです。これを明らかにしていかれたのが『教行信証』でしょう。

その行卷に、つまり『正信偈』の話ですけれども、私が遇った南無阿弥陀仏は一体どなたからもたらされたものか。私にとっては親鸞聖人

というお方である。親鸞聖人はどなたからか、法然上人である。法然上人はどなたからか、善導大師である。善導大師はどなたから南無阿弥陀仏の目覚めをいただいたのか、それは阿弥陀仏だ。そして、阿弥陀仏が南無阿弥陀仏というこの六字を願いとして立てられたのはなぜなのかと言つたら、必ずここに私という存在があるわけです。このどうやっても救われない生死の迷いの中で、迷いを繰り返し、人生の真実を知らない今まで生き、そして死んでいく。このどうやっても救われ難い私の存在があつて、そこから南無阿弥陀仏という願いが生まれたのでしょうか。

正信偈はまさにその体系ですね。

「帰命無量寿如來 南無不可思議光」というのは、南無阿弥陀仏に出遇つた私の姿です。そこから「法藏菩薩因位時 在世自在王仏所」と法藏が

起こされた願い。それに日覚めた釈尊。釈尊の真意を伝えた善導大師、法然上人。そしてその流れは今こうして仏教を聞く私に戻ってきます。

### 法話の組み立て方

法話は、自らが聴聞するという場に立つてこそ組み立てることができ

ます。自分が話したいことではなく、

自分が聞きたいことを話すのです。

ただ、それをいきなり自分の言葉で

表現しろと言つても無理でしょう。

ここでは伝統的な法話の組み立て方をお話します。

法話は何を聞くのか。「仏願の生起本末」とあります。なぜ仏法の話をするときに「私」という存在の話をすると、それが「私」のこととして聞かれるのです。私が始まって私のところに届いた南無阿弥陀仏。法話で語るのは正にここなのです。

「私」の存在が根底にある南無阿弥陀仏の救い、それが二五〇〇年の伝灯を繋いでいま私に届いている。それが「体系」です。ですから、お話をするときに親鸞聖人はこう言われた、法然上人はこう言われた、善導大師はこう言われたと話をしていくのでしょうが、この始点と終点が明らかにならなかつたら、ただの講義、解説になるだけです。

用いることが多いと思いますが、讃題を使っている方はおられますか。お西では始まる前に必ず讃題を読まれてその後お話ししますね。もちろん、無くとも法話にならないということはありませんが、話の主題をお聖教の言葉に置くことで、法話の主題が明確になり内容の軸足が定まるように思います。

よく大谷派では、法話なのか感話なのかわからないという感想が聴かれます。自分の話をしていてもそれがだけで終わってしまったら、それが今までです。讃題という形でなくとも、お聖教の一文を最初に出してから話をするのは大事だと思います。

次に「法説」。これは讃題を解説するものです。讃題として出したお聖教がどういう意味であるのかを説明します。自分の言葉で、わかりやすく説明します。

そして、「比喩」。仏法を言葉として例でいく為の例話です。次いで例



話と讃題を結ぶ「因縁」、そして「結勧」、これは「合法」「法説」とも言われます。この「讃題」「法説」「比喩・因縁」「結勧」という流れで話をします。もちろん、この通りにやらなければいけないというわけではないのです。型がないとそれを破ることも出来ない。完全に自由に話していいとなつたら、どうして良いのかわからぬし、そもそも法話をするとといふスタートラインに立てない。法話というのは出来る状態になってから教えとどう関係するのかがわからなっています。

ここまで「讃題」です。話をするお聖教を提示するのです。

「今日はこの和讃についてお話しさせていただきます。生死の苦海と人生というのが苦しみの海であると。こういうことを親鸞聖人は言われたことです。そしてその海というのはどこかに辿り着いてどこかで安心したいということがあれば良いのだが、どこまでこの海を泳いでもほとりがないというのです。」

私が娘に、お前の将来の夢は何かと聞いたのですが、お嫁さんになりたいって言うのです。お嫁さんになりました。お嫁さんは、まあいいなと思ったのだけど、結婚する前はどうなんだって言つたら、結婚する前は

するものではありません。聴聞と同じで、歩みを始めなければ育てられるという事もないのですから。

具体的にお話ししましょう。「讃題」と「法説」から。

「生死の苦海ほとりなし」とあるのは、自分の人生の道程ですね。受験勉強をしているときは、なんですか一生懸命するのかといったら、この生死の苦海を何とか渡り切りたいと思うからです。一生懸命仕事をしたりとか、一生懸命子育てしたりとか、みなこの苦しみの海、悩みの海を、何とか自分なりに一生懸命泳いで渡り切って、安心できる所にたどり着きたいという思いがそぞらせるのでしょう。

「生死の苦海ほとりなし」とあります。私の想いや経験を通じて話していくのです。例えばこんな感じです。

「生死の苦海ほとりなし」とあるのは、自分の人生の道程ですね。受験勉強をしているときは、なんですか一生懸命するのかといったら、この生死の苦海を何とか渡り切りたいと思うからです。一生懸命仕事をしたりとか、一生懸命子育てたりとか、みなこの苦しみの海、悩みの海を、何とか自分なりに一生懸命泳いで渡り切って、安心できる所にたどり着きたいという思いがそぞらせるのでしょう。

私が娘に、お前の将来の夢は何かと聞いたのですが、お嫁さんになりたいって言うのです。お嫁さんになりました。お嫁さんは、まあいいなと思ったのだけど、結婚する前はどうなんだって言つたら、結婚する前は普通の高校に行って普通の大学に行つて普通の会社に入りたいって。普通の会社に入ってどうするんだって言つ

たら、普通の会社で銀行員か公務員と結婚して寿退職してとか言うわけですよ。結婚したらどうするんだと言つたら、子供を二、三人産んで普通に暮らしてぱっくり逝きたいと。こういうやり取りを聞いていて、横にいた妻が、あんた夢がないねっていうわけです。確かに夢がないなと思いました。でもよくよく考えたら、この夢のない普通の人生を送るのにどれだけ大変な事かって、実感しない人はいないでしょう。私たちはそれぞれに自分がこの苦しみの海を渡るにはどうしたらいいかと考えて考えて、考え抜いて生きるわけです。どうやつたらうまく渡れるか、一生懸命渡れるか、幸せに渡れるかと思って。そうやって一生懸命生きていこうとするわけです。若い人も年取った人もみんな変わりません。何とかこの海をちゃんと泳いでいるのかって思っているわけです。

ところが、そうやって懸命にこの人生を泳いでも、どこかに行きつい

たということがありましたか。

普通、私たちが泳ぐときは、「あよかつた」という所までたどり着きたいと思うのだけれども、人生において泳がなければならないでしょう。「あ」という所が無いじゃないですか。

あつたとしても、また次の所を見つけて泳がなければならないでしょう。どこまでもこの私の苦海が終わらないのです。

私たちは、ずっとこの苦海をどうやって一生懸命泳ぎ抜くかということばかりを考えてきたけれども、どう迷い続けている私を乗せて必ず渡すはたらきがある」と言うのです。

「でも親鸞聖人は一生懸命頑張って人生を生きても、行き着く所がない。それどころか、力尽きて沈み続けているじゃないかという。だから、そのどうにもならない私の現実、ずっと迷い続けている私を乗せて必ず渡すはたらきがある」と言うのです。

「でもならない現実の中で、絶対に私を見捨てないというはたらきに遇うのだと言われます。

努力して自己を向上してこの人生を生き抜いていこうと思うのだけれども、それだけはどうやっても解決のつかない自分の人生における根本の迷いがある。どこにも行き着けなく所が無い、そういう海をずっと泳ぎ続けて、力尽きて沈んで、生まれないかって思っているわけです。

が私達ではないですか。

これが、「比喩」です。

そしてこの後が「結勵」といって、法話の結論に至ります。ここでは話してきた「比喩・因縁」の内容から、お念佛の救いを説きます。こんな感じです。

「でも親鸞聖人は一生懸命頑張って人生を生きても、行き着く所がない。それどころか、力尽きて沈み続けているのです。」

これが一般的な仏教の法話スタイルです。必ず最後は結論で着地します。話す方にとっても聞く方にとつても受け入れやすいことは受け入れやすいのですが、大谷派の法話というのはここで終わらないところにまた魅力があるとも言えます。本当は無理に着地しなくてもいいし、講題の通りに話さなくても良いかもしません。でも、こういう一つの流れを知つておくのは悪いことではないと思いますし、この構成を身につけて上での、そこで軸足を置いて自在に色々な話をしていく事もできるでしょう。

なくならない私の人生の迷いに向

合わせ、そしてその迷いを破るはたらきに出遇われた。阿弥陀仏は懸命に正しく行きなさいとは言われないのです。私はどこまでも迷い続ける存在だと気づかせるのです。その気付きを与えるはたらきに遇うときに、私は迷い身のまままでこの人生を生きていけるのです。

研修会報告①

## 「青少年のつどい」開催

[1/20~21]

会場 梅池高原スキー場



毎年冬季開催しております青少年のつどいは、今年度も梅池高原スキー場を利用し一月二十日～二十一日にかけて行いました。二十一人の参加者にスキーやスノーボードなどのスポーツを通して、自己的の体力作りと協調性を養い、民宿うつぎ荘での宿泊の中で集団生活の大切さを学んでもらいました。そして阿弥陀様に手を合わせることやお勤めをすることで、阿弥陀様を今まで身近に感じてもらえるように子供たちと過ごしてまいりました。初参加した子供達は、新しい出会いの中で友情や優しさを

学べる環境になったと思います。以前から参加している人にとっては、お互いの成長など新しい発見の場にならったのではないでしょか。日中のスキーは班ごとに分かれて技術の向上に励んで、夜は念珠作りレクリエーションなどを通して交流を図ってもらいました。

第十二組 善念寺 岩田一定

私達スタッフも子供達と出会えたこのご縁で、人ととのつながりの大切さを学ばせて頂きました。夏には児童研修大会もあり、その活動が公共の利益と福祉に反しない。オウムは身分を隠し・偽り、公共の利益と福祉に反する活動を行つたからこそ「(破壊的)カルト」なのである。ただ単に見た目やその教義などが我々の常識や価値観からかけ離れていて変だからカルトなので無い、と。

親鸞会に関しては布教・勧誘の方



のつどいは、今年度も梅池高原スキー場を利用し一月二十日～二十一日にかけて行いました。二十一人の参加者にスキーやス

ノーボードなどのスポーツを通して、自己的の体力作りと協調性を養い、民宿うつぎ荘での宿泊の中で集団生活の大切さを学んでもらいました。そして阿弥陀様に手を合わせることやお勤めをすることで、阿弥陀様を今まで身近に感じてもらえたように子供たちと過ごしてまいりました。初参加した子供達は、新しい出会いの中で友情や優しさを

学べる環境にならったと思います。以前から参加している人にとっては、お互いの成長など新しい発見の場にならったのではないでしょか。日中のスキーは班ごとに分かれて技術の向上に励んで、夜は念珠作りレクリエーションなどを通して交流を図つてもらいました。

私達スタッフも子供達と出会えたこのご縁で、人ととのつながりの大切さを学ばせて頂きました。夏には児童研修大会もあり、その活動が公共の利益と福祉に反しない。オウムは身分を隠し・偽り、公共の利益と福祉に反する活動を行つたからこそ「(破壊的)カルト」なのである。ただ単に見た目やその教義などが我々の常識や価値観からかけ離れていて変だからカルトなので無い、と。

第十一組 専廣寺 蟹川俊治

研修会報告②

## 「新宗教に関する研修会」開催

[4/12・5/22]

講師 瓜生 崇氏（京都教区 玄照寺）

会場 第1回..第十一組 光顕寺

第2回..第十三組 圓林寺

第十一組 光顕寺

法など様々な問題はあるもののカルトと断言までは出来ないのでないかとの事でした。

我々はつい、親鸞会に入っている人を「なんでそんな団体に入るのか」と思いますが瓜生先生の言われた「親鸞会に入るのにはそれなりの理由がある。真剣に教え・道を求めているからで、求めてもいい人は最初から入らない」ということを常に意識して、違いを否定したりするのではなく違ひを認め合い自らを問いませんおし続けていかなければならない、と強く思いました。

講師の瓜生先生は、まずオウム真理教と親鸞会について話をされました。例えはオウム真理教は古い教典をきちんと編纂していく麻原の説教もその教えを踏まえた上の内容であること。布教の為の殺人の正当化など恐るべき教えもその教典教義に則ったものであり、先の大戦時に於いて本願寺教団も布教の為の殺人を肯定していた過去があつた。ならばオウムと本願寺教団の違いは何か。本願寺教団は身分を偽つたり隠したりしないし脱会の自由があり、その活動が公共の利益と福祉に反しない。オウムは身分を隠し・偽り、公共の利益と福祉に反する活動を行つたからこそ「(破壊的)カルト」なのである。ただ単に見た目やその教義などが我々の常識や価値観からかけ離れていて変だからカルトなので無い、と。

親鸞会に関しては布教・勧説の方

研修会報告③

# 「法話研修会Ⅰ・Ⅱ」開催

[4/13・5/21]

講師 瓜生 崇氏（京都教区 玄照寺）  
会場 富山東別院会館

四月十三日と五月二十一日の二回にわたって京都教区の瓜生崇氏を講師として、「法話研修会」が開催されました。一回目は基礎編として、法話の意義や役割についてや、法話の具体的な組立て方法の講義を受けました。そして、最後にその組立て方法で、次回の研修会までに、四百字詰原稿用紙十枚（二十分钟左右）の法話を考えてくるという宿題をいたしました。

四月十三日と五月二十一日の二回にわたって京都教区の瓜生崇氏を講師として、「法話研修会」が開催されました。一回目は基礎編として、法話の意義や役割についてや、法話の具体的な組立て方法の講義を受けました。そして、最後にその組立て方法で、次回の研修会までに、四百字詰原稿用紙十枚（二十分钟左右）の法話を考えてくるという宿題をいたしました。

## 話しこみ法話 研鑽シート

### 【このシートの使い方】

このシートは、裏面は黒板の代わりとして、法話の板書に使ってください。板書は話の内容や構成があとからわかるように書きましょう。

表面（この面）は、法話後の講評に使ってください。

### 【講評のポイント】

- ・法話の態度はどうでしたか？  
(上から目線ではなかったか、言葉遣いは適切か、原稿ばかり見ていないか)
- ・発声はどうでしたか？  
(早口でないか、語尾ははつきりしているか、聞き取りにくくなかったか)
- ・板書はどうでしたか？  
(あとから見てわかるように要点を書いているか、伝わるような板書になっているか)
- ・法話の内容はどうでしたか？  
(伝えたいことは明確か、親鸞聖人の言葉は入っているか、教えを伝えているか、「私が抜けてただの説明になっていないか）

回とは異なり、第二回は実践に重点を置き、「話しこみ法話」と呼ばれる形式で行われた。参加者が無作為にペアを組み、各自用意した法話原稿を元にそれぞれ二十分間話し、互いに講評を行うというものであった。

なるほど話し込み法話では、自分の話について、その構成や態度・話し方などを客観的に見ることができるために、自らの弱点と言えばよいのか、普段誰からも指摘してもらうことのないような点を知ることができた。

先日、富山別院で行われた法話研修会（第二回）に参加しての所感を少し述べたい。まず簡単にその内容をおさらいすると、

座学形式で行われた第一回とは異なり、第二回は実践に重点を置き、「話しこみ法話」と呼ばれる形式で行われた。参加者が無作為にペアを組み、各自用意した法話原稿を元にそれぞれ二十分間話し、互いに講評を行うというものであった。

（教え）を自らの上に確かめ、それを言葉にするという二つのことは、見

た目には似ていようとも、必ずしも同じではないという点には注意すべ

きではないか。様々な場面で分かり

やすい話ばかりが要求される昨今の

状況の中で、「伝えるにはどうしたら

よいか」ということに気が取られる

ことがあるが、それに先立つて「私に

何が伝えられているのか」というこ

とを確かめる必要も強く感じている。

第十二組 勝福寺 大中臣冬樹

おそれく、こうした練習を重ねることで話のフレームが形になれば、ある程度は物怖じせずに人前に出るこ

とができるようになると想像される。

しかし、自信をもって堂々と人前で話ができるようになることと、法話（教え）を自らの上に確かめ、それを言葉にするという二つのことは、見

た目には似ていようとも、必ずしも同じではないという点には注意すべ

きではないか。様々な場面で分かり

やすい話ばかりが要求される昨今の

状況の中で、「伝えるにはどうしたら

よいか」ということに気が取られる

ことがあるが、それに先立つて「私に

何が伝えられているのか」というこ

とを確かめる必要も強く感じている。

研修会報告④

# 富山教区「秋安居」開催

[3/1～2]

講師 大桑 齊氏（おおくわ ひろし 氏）  
会場 富山東別院会館

今日は秋安居事前輪読会に二回参加させて頂くことができました。この会があるおかげで関心を持って講義に臨むことができます。計四回の講本をただ輪読した会です。夜の午後三時から五時までの勉強会で、大桑先生の『蓮如上人御一代記聞書』の講本をただ輪読した会です。夜の勉強会ではないので、朝日町からでも高速の凍結を心配せずに参加できました。読みの難しい文字があるとお互いに教え合い、また他人の素読を聞き、目で確認しながら考えることができるのでとても効率的です。今日はご門徒さんと一緒に学び合うことができ、とても新鮮でした。

今回の講本は分量が多く資料編が少なく大桑先生の安居にかける熱意を感じました。ただ、輪読会終了時点で講本を最後まで通読できなかつたことと、もう一つは正月に還淨された西心寺さんと一緒に学べなくなつたことがとても残念です。僧伽を実感する会が教区内に数多く生まれればと思います。

第十三組 光照寺 藤條法彰



講師 阪本 仁氏（本山解放運動推進本部委員）  
講師の阪本氏山解推）から、問題の所在を丁寧にお話し

研修会報告⑤

## 「是旃陀羅問題學習會」開催

【4／18】

講師 阪本 仁氏（本山解放運動推進本部委員）

会場 富山東別院会館



座談会の様子

二〇一八年四月十八日、教区解推公開講座として「是旃陀羅問題學習會」が開催されました。

私たちが依りどころとする浄土三部經の一つ『仏說觀無量壽經』には、「是旃陀羅」という言葉が使われています。また大谷派では從来、旃陀羅を穢多・非人のようなものと解釈し布教してきた事実があります。

一九二三年の全国水平社創立以来これらのが差別性が問われ続け、二〇一三年には部落解放同盟広島県連合会よりあらためて問題提起がなされましたが、これを直接のきっかけとして、現在全国の教区で學習會が展開されています。

講師の阪本氏山解推）から、問題の所在を丁寧にお話し

いただき、その後質疑応答や、車座になつての座談会も行いました。全體を通して、私たちの無知・無関心や、また一応の理解はできても自分の問題とはならず痛みは感じないことが知られた學習會でした。この一回の學習會は単にきっかけであり、これから各々が自分の課題として考えたり『觀經』を受けとめ直していくことが必要なのだと思います。

講師の阪本氏山解推）から、問題の所在を丁寧にお話し

講義の中でも安藤先生は、私たちがなぜ佛教に学ぶか、なぜ「阿弥陀經」に学ぶかを考える際には、釈尊がなぜ教えを説かれたか、なぜ「阿弥陀經」を説かれたかという視点でいただいていくことが大切だとお話しになりました。なぜ釈尊が教えを説かれたか、それは偏に苦悩する者を救うためであり、釈尊自身が救われた目覚めの法（縁起）を言葉にして知

研修会報告⑥

## 「聖教學習會と『仏說阿彌陀經』に学ぶ」開催

【5／31】

講師 安藤 義浩氏（教学研究所嘱託研究員）

会場 富山東別院会館



講義の様子

昨年度に引き続き、教学研究所嘱託研究員の安藤義浩先生をお招きして、釈尊が「阿弥陀經」でお伝えになりましたかったことや、親鸞聖人が「阿弥陀經」に学ばれたことを訪ねていきました。特に今回は、講義の聞き方や受け止め方を確かめ、各々が学びを深められるようにと、講義①と講義②の間に座談の時間が設けられました。

講義の中で安藤先生は、私たちがなぜ佛教に学ぶか、なぜ「阿弥陀經」に学ぶかを考える際には、釈尊がなぜ教えを説かれたか、なぜ「阿弥陀經」を説かれたかという視点でいただいていくことが大切だとお話しになりました。なぜ釈尊が教えを説かれたか、それは偏に苦悩する者を救うためであり、釈尊自身が救われた目覚めの法（縁起）を言葉にして知

らせたいという願いがあつたからです。苦悩する者、すなわち全ての者、万人の救いが説かれているのが「阿弥陀經」であるということです。また、「阿弥陀經」の後半は諸仏が念じてきました。特に今回は、講義の聞き方や受け止め方を確かめ、各々が学びを深められるようにと、講義①と講義②の間に座談の時間が設けられました。

「阿弥陀經」は、日々の法務においても読誦されることの多い、私たちにとって身近なお聖教の一つです。講義や座談では、この「阿弥陀經」が追善や鎮魂といった先祖供養のためのものと受け取られているのではないかということが話題になつていましたが、日ごろ触れる機会の多い分、「阿弥陀經」のここにについていねいにお伝えしていきたいと思

いました。

第十二組 長安寺 庭田龍信



副会長	丸山 忠正（西光寺）	杉森 達朗（第十組 真行寺）
副会長	田村 修（中堂寺）	館 純朗（第十組 極性寺）
第十組	松本 弘行（長龍寺）	蜷川 俊治（第十一組 専廣寺）
会長	宮川 賢一（唯見寺）	砂谷 知昭（第十一組 專入寺）
副会長	早水 信弘（真成寺）	庭田 龍信（第十二組 長安寺）
第十一組	野澤 一成（願行寺）	華藏閣行文（第十二組 託法寺）
会長	石若 久義（善行寺）	藤谷 英順（第十三組 雲龍寺）
副会長	澤崎 高平（専入寺）	（一〇一八年一月一日～一〇一八年六月三十日）
第十二組	山西 弘（長圓寺）	住職就任
会長	平野 俊二（本傳寺）	（一〇一八年六月二十八日）
副会長	寺口 則康（勝福寺）	（一〇一八年一月一日～一〇一八年六月三十日）
第十三組	柏原 保正（専徳寺）	得度
会長	上木 収治（真淨寺）	（一〇一八年一月一日～一〇一八年六月三十日）
副会長	廣川 光久（常光寺）	（一〇一八年六月七日）
副会長	（任期 二〇一八年七月一日～二〇二二年六月三十日）	（一〇一八年一月一日～一〇一八年六月三十日）
委員長	島倉 慶晃（第九組 永源寺）	教師入位
副委員長	藤田 徹（第十二組 勝樂寺）	（一〇一八年一月一日～一〇一八年六月三十日）
委員	大伴 慎介（第十三組 持專寺）	（一〇一八年三月八日）
委員	高山 芳樹（第九組 樂圓寺）	（一〇一八年三月十七日）

## 教化日誌

（一〇一八年一月一日～六月三十日）

1月

教区教化委員会代表者集会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

【見義悦子氏】

ご命日のつどい『如大地』編集委員会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

第九組同朋の会推進講座

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

富山県眞宗大谷派教誨師会臨時総会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

ご命日のつどい『幽溪浩輪番』

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

解放運動推進協議会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

青少年のつどい「スタッフ会議」

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

門徒研修小委員会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

教区坊守会報恩講

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

社会教化小委員会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

准堂衆会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

第九組同朋の会推進講座

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

青少年のつどい（～21日）

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

富山別院教化委員会企画会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

『如大地』編集委員会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

北陸連区差別問題研修会事前協議会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

声明作法講座

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

富山別院教化委員会企画会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

北陸連区推進員研修会（～7日）

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

富山教区・高岡教区地方協議会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

教区門徒戸数調査委員会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

割当審議委員会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

富山別院教化委員会企画会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

教区坊守会報恩講座【水嶋 聰氏】

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

北陸連区正副議長会（～26日）

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

「秋安居」学習会①

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

ハンセン病問題全国交流集会準備会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

全国駐在会（～30日）

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

第十組組会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

「秋安居」学習会②

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

ハッセン病問題全国交流集会準備会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

第九組組会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

第十組組会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

「秋安居」学習会③

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

第十二組組会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

「秋安居」学習会④

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

第十三組組会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

「秋安居」学習会⑤

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

北陸連区教誨師研修会（～6日）

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

教区坊守会開法講座【水嶋 聰氏】

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

北陸連区駐在会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

第十三組組門徒会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

第十二組組門徒会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

教区同朋の会役員会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

あいあう会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

声明作法講座

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

「秋安居」学習会②

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

教区教化委員会代表者集会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

ご命日のつどい『見義悦子氏』

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

『如大地』編集委員会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

第九組同朋の会推進講座

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

部落差別問題研修会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

組織拡充小委員会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

「秋安居」学習会③

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

北陸連区教務所長・次長・主計会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

教区教化委員会代表者集会

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

ご命日のつどい『見義悦子氏』

（一〇一六年一月一日～一〇一六年六月三十日）

『如大地』編集委員会

（一〇

10	5	1	春の法要（～3日）	11	1	1	1
日	日	日	掛役会総会	日	日	日	日
			准堂衆会				
			手づくりおもちゃの講習会				
			解放運動推進協議会				
			【田中世津子氏】				
			声明作法講座				
			『正信偈から学ぶ』学習会②				
			【藤場俊基氏】				
			新宗教に関する研修会①				
			【北陸連区駐在会】				
			法話研修会I				
			ご命日のつどい				
			【瓜生 崇氏】				
			【瓜生 崇氏】				
			【月見洪文氏】				
			【名和達宣氏】				
			教区門徒会（臨時会）				
			解説公開講座「是旃陀羅問題に関する学習会」				
			【阪本 仁氏】				
			【如大地】編集委員会				
			第九組同朋の会推進講座				
			寺族研修小委員会				
			社会問題研修会				
			声明作法講座				
			【太田浩史氏】				
			富山別院院議会				
			組織拡充小委員会				
			30	29	26	25	24
			日	日	日	日	日
			23	18	17	16	15
			日	日	日	日	日
			22	21	20	19	18
			日	日	日	日	日
			21	20	19	18	17
			日	日	日	日	日
			20	19	18	17	16
			日	日	日	日	日
			19	18	17	16	15
			日	日	日	日	日
			18	17	16	15	14
			日	日	日	日	日
			17	16	15	14	11
			日	日	日	日	日
			16	15	14	13	12
			日	日	日	日	日
			15	14	13	12	11
			日	日	日	日	日
			14	13	12	11	10
			日	日	日	日	日
			13	12	11	10	9
			日	日	日	日	日
			12	11	10	9	8
			日	日	日	日	日
			11	10	9	8	7
			日	日	日	日	日
			10	9	8	7	6
			日	日	日	日	日
			9	8	7	6	5
			日	日	日	日	日
			8	7	6	5	4
			日	日	日	日	日
			7	6	5	4	3
			日	日	日	日	日
			6	5	4	3	2
			日	日	日	日	日
			5	4	3	2	1
			日	日	日	日	日

『如大地』第143号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力をお願いいたします。

道の問題でもある。『如大地』の読者  
の顔が見えているのか。本当に伝  
えたいたことを吟味し掲載しているの  
か。明日があるといって今日を逃げ  
ていいか。「明日ありと思う心の  
徒桜、夜半に嵐の吹かぬものかは」。  
今を生き、真宗や教区の現状に向き  
合い、寄り添つていけるような、そ  
んな教区広報誌に私はしていきたい。  
これからも『如大地』を宜しくお願  
い申し上げます。

編集後記

私は『如大地』の編集委員として三期務め、今期も編集委員長として、この教区広報誌に携わることと相成りました。この九年間は同時に私の僧侶として歩みだした期間でもあります。『如大地』を通して寄稿して頂いた原稿を掲載するにあたり、私自身も大変勉強になり、自身の在り方が問われる日々でもありました。サッカーワールドカップで「半端ない」という言葉がありましたが、半端なく生きてきたといえるか。「いいか、半端に生きるな。創作物は人が試される。その人がどれだけ痛みと向き合ったか。憎しみと向き合つたか。喜びを喜びとして受け止めたか。逃げるな」。これは朝ドラの登場人物のセリフであるが、自分に言われているようで非常に耳が痛かった。これは創作物に限ったことだけではなく、今や住職となつた私の仏道の問題でもある。『如大地』の読者の顔が見えているのか。本当に伝えたいことを吟味し掲載しているのか。明日があるといって今日を逃げていかないか。「明日ありと思う心の徒桜、夜半に嵐の吹かぬものかは」。今を生き、真宗や教区の現状に向かい、寄り添っていけるような、そんな教区広報誌に私はしていきたい。これからも『如大地』を宜しくお願ひ申し上げます。